

六年生として考えたこと

豊川小・6 加藤 真也

「やばいなあ。またできちゃった。」

八月三日の朝、舌の左側がビリつとした。くり返してきてしまうほどの口内えん。またあの痛みと戦わなければならないと思うと、なんとも言えない、いやな気持ちになる。ぼくの口内えんはクレーターのように穴が開く。小学校に入った時から何度もこの痛みを経験している。初めのころは気になって、かんでしまつて、もっと悪化したけれど、それはなくなつた。慣れたといえれば慣れたけれど、やっぱり痛い。治るまでに一週間以上かかつてしまう。今回ののはでき始めで、二、三ミリぐらいのクレーターが二つ。でも、今のぼくは、落ちこんでいる場合ではない。四日後に大事なイベントが待っているからだ。体操教室のキャンプで、二はく三日、岐阜県中津川市のアオミキャンプ場に行くのだ。ぼくは一年生のころから毎年参加している。それぐらいこのキャンプが好きだ。しかも参加できるのは六年生までなので、これがラストチャンスになる。

「絶対に治す。絶対に治す。絶対に治す。」

ぼくは何度も言った。声に出しても言ったし、心の中でも言った。いつもなら痛みをまぎらわすために氷を口の中に入れるけれど、それもやめた。キャンプでは氷なんてなめていられないから。早ね早起きをする。かたいものやしみるものは食べない。誤ってかまさないように注意する。体を動かす。できることはなんでもやった。口内

えんパッチというシールのようなものは、すぐにはがれてしまい効果がないと思つていたけれど、今回は使つてみた。意外と良くて、痛みが少なくなつたし、クレーターが大きくなるのを防げた。このように、ぼくの努力と工夫が報われて、口内えんはほぼ治り、無事に八月七日をむかえることができた。

キャンプには妹といっしょに参加しているが、班は別々になる。豊橋や岡崎、名古屋などの地域から参加している子たちが六、七人、ランダムに組まれた班で、知らない子ばかりいた。年長から六年生までいろいろな学年の子がいて、いっしょの部屋にとまったり、協力してご飯を作つたりして活動する。ぼくの班には年長の子が三人と一年生が一人、四年生一人、そして、ぼくの合計六人の班だった。小さい子が多かったせい、バンガローの中は大きすぎで走り回る、あばれる、さけぶ、なぐってくるなど、ものすごい状態だった。夜、ねる時間になつたときも勝手に盛り上がつていて、

「ギャハハハ。」

「ギャー。」

と笑い声がとにかくでかい。

「迷わくになるからやめて。」

と何度も言つたけれど、やめてくれない。注意をしても一時的に静かになるだけだ。うるさいな、いい加減にしてほしい。ぼくは六年生でたい性がついているからがまんできるけれど、このうるさい状態をどうしたらいいんだ…と困つてしまった。困り果てたぼくは先生に報告して、先生が解決してくれた。

ぼくは今回のキャンプは、ただ楽しむだけではだめだと思つた。最後だからいい思い出を作りたい、絶対に楽しみたいと思つて、口

内えんをぎりぎり治して参加したけれど、自分のことだけを考えてはだめだと気づいた。六年生はいろいろなことを頼まれるし、任される。例えばご飯作りの時、火を起こす係を頼まれた。先生がチャッカマンで新聞紙に着火するときに、ぼくは火を大きくするために、うちわで思いきり風を送った。すると、火がついた新聞紙が飛んでしまい、周りにいた班の子たちに、危ない思いをさせてしまった。周りの様子を見て、加減しないといけないことが分かった。また、キャンプファイヤーの前に六年生だけが呼ばれて、火の神から預かった火を受けわたして、点火する役目をするようになった。ファイヤーの始まりをかざる重要な役で、しかもそんな役は初めてなので、ぼくはきん張した。何度か練習をしてから、いよいよ本番になり、ぼくは火の神の指示をよく聞いて、下の方からしん重に火を置いた。かれ草がバチバチと音を立てて燃え始め、やがて大きな火になった。ぼくの顔が熱くなった。「ちゃんとできたぞ」と思ってた心の中も熱くなつた気がする。何かを頼まれたり、任されたりするのは信じてくれているからだと思う。自分に任されたことをしっかりとやりきることが責任だ。ぼくはこのキャンプでしっかりと責任を果たそう。ぼくを信じてくれるからそれに応えるようにがんばろうと思った。

次の日の夜、ぼくたちのバンガローはやっぱり大さわぎだった。でも、今日のぼくはただ注意したり、困ったりするだけではなかった。一年生や年長の子たちは、今が楽しいし、楽しみたいんだ。そう思ってたぼくは、

「氷にはもうこおりごり。」

「このとり肉は取りにくい。」

などの、ダジャレを連発した。ぼくのこん身のダジャレは大うけで、

話を聞いてくれるようになり、いつの間にか一年生たちと仲良くなれた。ぼくは今まで自分の都合で、相手を思い通りにさせようとしていたと思う。でも、それはいくら正当な理由があっても、自分勝手なのかもしれないと思い直した。責任がある人は、相手が聞いてくれるように、相手の気持ちを考えて動かなければならない。

キャンプが終わり、帰ってきた直後、ぼくは全身にじんましんができてしまった。初めてのことでなく、つかれるところなる。体をボリボリかきながら、ぼくは心から楽しかったと思った。任されたことがちゃんと果たせた。信じてもらえた気持ちに応えた。口内えんを乗り越えたし、今までできなかったことができるようになった。こういう気持ちを達成感というのかなとぼくは思った。